
お嬢様と執事様

炉漣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お嬢様と執事様

【Nコード】

N7415Y

【作者名】

炉濤

【あらすじ】

南條来人は気付けば見知らぬ無機質な部屋にいた。
まったく知らない景色に困惑しながらも『ふっきれた』南條は部屋を飛び出し、そこが巨大な謎の施設だと知る。

その施設で出会う場違いなドレスを纏った少女ディエナと共に南條は施設からの脱出を図る。

だが、その行く手を阻むバケモノ達。

そして、巻き込まれる南條達。

パンデミック×ファンタジー的な感じで。

昔「iのべる」っ携帯小説サイトで書いてたモノを書き直してるものです。

1・始動

まず始めに確認しておかなければならない事がある。

知っているか否か、だ。

知らないと言うのであれば心して掛かるが良し。知っていると云うのであれば新たな過程に期待すれば良し。

1・始動。

南條来人は単純に『拉致された』と疑っていた。

何が起きたのか、誰がこんな事をしたのか、答えを求めるよりも前にまずそう思った。そして次に、何をしていたか、と幾日分前の物が分からない記憶を掘り探した。が、見つからずに唸る他なかった。

と、言うのも。

「ここは何処だっただ……」

コメカミを潰されているかの様な痛みが走り続ける頭を出来るだけ刺激しないよう起き上がり、辺りを見回せばそこは南條の全く知らない場所だった。

正確には部屋、畳六畳程の無機質で、かつ近未来的雰囲気を感じさせる眩いばかりに真っ白く輝く空間。ここはそうだ。

部屋には近づいたら斜めにスライドして開きそうな扉が一つ。その他にはまったく何も無い。

記憶を失っているような感覚は少なくとも無い。一応、一定時間前の短い期間の記憶がなくなっている様な不思議と浮かない気分ではあるが、状況が状況だけにそれが本当に記憶云々によるモノとは言いい切れない。

（何がどうなってやがる……？　ここはどこだっただよ？）

いつの間にか意識を失っていて、気付けば全く見知らぬ謎の部屋。

拉致された、と疑つてもしかたがない、と言いつける程の状況である。

ここでまず何をすべきか。その答えは目の前にポンと置いてある。慌てふためいて騒ぐより、目標があるのだから動いた方が無駄は省けるだろう。

南條はそういう男だった。

生まれつきの明るめの茶髪はやたらと人目を引き、これまでも南條が望まない嫌な刺激を引き起こしてきた。若いうちに引き起こされる想像の容易いことであるが、そんな『つまらない』刺激の数々のおかげか、南條は何か異常が起こった場合でも冷静でいれる体質を得ていたのだ。

こんな状況だというのに気たるそうに後頭部を掻きながら目の前の扉へとゆっくりと歩いて近づく。

扉の一步步まで来たところで、見た目通りの動作で扉は自動的に開いた。

——と、同時、その先に見えるはずだった真っ白い廊下、よりもまず腐った肉と嘔吐物を混ぜた様な腐臭が南條を襲った。

吐き気を催す程の匂い。その原因は明確だった。

まるで、待機していた、と言わんばかりに扉があつたその場所——つまりは南條の目の前——に、一つのドス黒く淀んだ影があつた。

「……ツクせえ!!」

突然現れた影と漂う腐臭に驚き、自然とそう叫んで南條は突然として現れたその影を避ける様に身を引いた。

影は揺れる様に歩き、少しばかり遅い速度で南條の目覚めたこの部屋へと侵入してきたかと思うと、歩幅に合わせながらゆっくりと方向転換し、南條と向き合った。

「あああああああ、……、ああああああアアアああああアああアアあああ」

影はゆらゆらと左右に揺れながら一歩、また一歩とすっかり無機質な床を踏みしめて南條へと迫ってくる。

「お、おい。なんだよお前……」

鼻をつまみながら、嫌そうに南條は言う。

牛糞に顔を自ら近づけて嗅ぐ臭いが近づいてくるのが恐ろしくて、南條は視線を斜めしたに落として、決して目の前の影には視線をやらず、迫る影に合わせて一步、また一步と後退する。

（すげえぞ、この臭い！ 強烈なんてレベルじゃねえっての！！）
うげえ、とこみ上げてくる吐き気に堪えながら、

「なんだよお前」

嫌そうに訊く。が、先程も聞いた様な気がして、返事が来ていないことに気付いた南條は面を上げて影に訝しげな表情で影を確認する。

「……、なんだよ。おっさん」

禿面のサラリーマン、中間管理職を連想させる様な中年男性だ。

「おおおおおおあ、アアアオああああオおおおおあ」

その男性はまともな人間とはとてもじゃないが思えない呻き声を上げながら、ふらふらと南條に近づいてくる。

血走った目に、散らかす様に口元に塗れたギラギラと光る涎が不気味さを演出している。

どうみても、ジャンキーだった。

「なあッ！？ 薬でもやってんのかよおっさん！？」

白目からたまにチラつく黒い瞳が南條を見下ろす。半分だけ開いて皮脂を混じらせてギトギトと嫌に輝く涎が飛び散って南條に掛かりそうになる。

南條がいくら呼びかけようとも、男性はその不気味な様子を振りまきながらヨタヨタと南條に迫るばかりでうんとともすんとも答えはない。正直その様は、聞こえていない様にも見えた。

耳が聞こえない、と言うよりは脳が認識していない、状況や様子から言ってそっちの方が正しいだろう。

「きったねえな！ くっそ！」

何にせよ、ジャンキーなんかとは関わりたくない、と南條は男の

脇を抜けてさつさとこの部屋から出よう、と考えた。

今見ている限りでは、男性の動きは遅い。とても、と言っても過言ではない程に異様に遅かった。これならばサツと横に抜けて走れば良い。

「ああああああアアアああアああオオオオオオオオオオオオオオオオオオあああ」

男性は相変わらず単純な動きで南條へと迫ってくる。

一歩、近づいてきたそのタイミングを南條は見計らって走り出した。

身を屈め、小学生時代を思い出させる様な全力での走りを取った。これでこんな悪臭とはおさらばだ、素直に、それこそ小学生の様に喜んだ。

が、その時だった。

男性の横を駆け抜ける丁度その時、体勢を低くした南條の目の前に、ボロリ、と肉肉しい何かが落ちてきて、ビチャリ、と床にその先を衝突させた。

その肉肉しい何かは細長く、その先を地面につけているが根元は男性へと続いている。

反射的に、南條は理解するよりも前にその肉肉しい何かを目で辿った。辿る他の選択肢がなかった。それ程のモノが目の前にあると脳のどこかで理解していたのかもしれない。勿論、本能も理性もそれを拒んでいたのだが。

「……あ、ア？」

辿りながら、既に行き着いたというのに視線は泳ぎ、現実の理解を拒否する。否定する。

肉肉しく、長いピンク色のそれは男性の横つ腹から溢れる様に飛び出し、垂れ下がっている。その先はドス黒く、またやたらと赤い色で無機質かつ異常に明るい床を汚している。

——鮮血、ではない。そんな新鮮味の感じれる赤みはまったくない。赤と例えるのが億劫になる様な赤い跡が床に引きづられて尾を

引いている。

「は？ え、ああ！？」

南條は思わずそんな頓狂な声を漏らした。

言わずもがな、男性の横つ腹から垂れ下がった、それを、途中で途切れた腸だと気付いたからだ。

気付いた、そうは言っても状況を把握するまでには至らないし、何故目の前にこんなモノがあつて、どうしてこの男性はこんな姿なのか、と処理しきれない事柄が多すぎて南條の思考能力は一旦活動を停止してしまっていた。

「おおおおオオおおオああアおおオアアアあああああ」
動きまで止めてしまった南條の頭上から、男性の腐臭と共に『腐った』手が伸びてくる。

（な……、なんだよコレ……）

本来そうであろう、そんな有り得ない空想上の出来事からワンテンポ遅れて、今まで腐臭に急かされていた吐き気とはまた違う、異常な程の量の嘔吐物が巻き戻される様な吐き気が南條の全身を駆け巡り、南條はえづく。

「があっ、げっ……げほっ！ ごほ！」

思わず全身に入っていた力が抜け、地に膝を着いてしまう。

結果、降りかかってきた男性の手を回避したのだが南條はそれに気付くはずもない。

なんとか吐かずには済んだのだが、あんなモノを見た後では南條も顔を上げる気にはなれない。目を上げるだけでも臓物が目に入る可能性がある、そんな状況で顔を上げるなんてとてもじゃない。

「な、なんだよ、畜生」

吐き戻したわけではないが、口をティーズシャツの袖で拭う。

動きたくなかった。このままだ床を見つめているだけでよかった。

気付けば全く知らない質素な部屋にいて、出ようとすれば臓物丸出しのジャンキー中年男性に出会ってしまう。

なんだこの状況は、と呆れた。

なにやってるんだ俺は、と呆れた。

そもそも、なんでこんな状況下に自分が置かれなくてはならないのか、と呆れた。

そう思うと、気持ち悪さや呆れよりも、まず苛立ちが募った。

何を惚けているんだ、とつと立ち上がって目の前の意味不明なおっさんをぶつとばして先に進んで真実を確かめろ。自分をこんな事にした奴を叩きのめしてやれ。

曲がった考えだ、という自覚はあった。

（ああ、くっそ）

今まででも似たような経験はあったのかもしれない。勿論、数あるソレは思い出せる様なモノではないのだが。

（めんどくさい。ほんつとめんどくさい。なんだよ畜生。ああ）

様々なことが頭を駆け巡った。

自覚はなくとも、この状況が『命の危機』であることを察していたのだ。そうして走馬灯の様に頭の中で溢れた考えなり思いなりは全て南條の『ふっきれる』までの道筋になっていた。

「ふざけんなよ畜生が！」

自身に気合を入れる様に叫び、南條は意気込んで立ち上がる。

すぐ目の前には腐臭と共に禿面の中年男性の歪んだ顔。見れば見るほどそれは人間の表情ではないと気付くが、ふっきた南條にそんな事は関係なかった。

ただ、目の前にいるそいつをぶっ飛ばせ。感じた嫌悪感の倍返してやれ。

南條は腐臭漂う中でも構わず、思いつき深呼吸して見せた。男性の手が目前まで迫っているというのに、だ。

「ああああアアアアアアア、オオオオああああアオオオああああ」

部屋には男性の汚い呻き声のみが蝕むように広がる。そんな部屋を覆すかの様な大声で、南條は声を上げた。

猛獣の雄叫びをも連想させるソレは目の前ば男性の呻き声は勿論掻き消したし、腐臭さえも吹き飛ばしたかと思う。

だがそれよりも、部屋には鈍い音が印象的に轟いた。

ゴツン！ とありふれた衝突音が弾け、部屋の中で短く反響した。南條の強烈な頭突きが男性の額を撃った音だ。

南條の額は赤みを持ち、男性は――大きく後方に吹き飛んだ。そのまま入り口付近に尻餅をついてゆっくりと立ち上がろうとする仕草を見せる。

「ふざけやがって！ マジで意味わかんねえっての！」

一撃食らわした事で満足、とまではいけなかっただろうが、南條はそれで『ふつきれた』のだ。

よたよたと、生まれたばかりの小鹿の様なおぼつく足取りで立ち上がるうとする男性に吐き捨てる様な言葉だけを置いて、南條は扉の向こうへと飛び出したのだった。

2・接触（前書き）

南條来人、謎の施設を探索

2・接触

2・接触。

「ったく。こん中は一体どうなってやがるんだ？」

一人訝って不満げにそう呟くのはミディウムヘアの茶髪に、整った顔立ちの青年南條来人だ。

いつの間にか見知らぬ部屋へと何者かの手によって運ばれ、あやふやな記憶の中で目覚めた南條は帰路を探して部屋から飛び出した。飛び出した先、その先、曲がり角を曲がった先、階段を上がった先、全てに見覚えはなかった。

どこに向かおうとも出口は見つからず、近未来的なデザインの真っ白な壁といくつかの小部屋が延々と続く通路をひたすら歩きまわった。南條がこんなここにいる以上は、何者にしろ『人間』がいなければ可笑しな話だが、それを肯定するかのように人間の影は一つとして見当たらなかった。

人影——思えば先程の中年男性。彼は何者だったのだろうか、と景色の変わらない廊下を歩きながら南條は考える。

思い出したくもないモノを見せられ、感じさせられた。異常なまでの腐臭に横っ腹から露出した千切れた腸らしき肉肉しい何か。そして呻き声にイカれた目。チラつくテレビの様に見え隠れした黒い瞳の不気味さは思い出しただけで身を震わしてしまう程の恐怖感を与えてきた。

（まるでゾンビだ。あれじゃ……）

思い出せば思い出す程、南條は眉を潜めた。

「はあ」

嘆息し、一度考えを切り替える。

もしかすればあの男性はただの薬中で、南條と一緒に偶然こんなところに連れて来られたのかも知れない。そう信じて考えを別の物に向ける。

先ず、何をすればよいか、だ。簡単、歩けば良い。何かを見つけたらそちらへと赴き、それに見合った行動をすれば良い。出口を見つけたら逃げ出す、人間を見つけたら話掛けて協力してもらう、といった具合にだ。

だから、南條はひたすらに代わり映えない景色の中を歩き続けている。

廊下の両サイドには部屋への入り口と思える斜めにスライドして開きそうな近未来的デザインの扉がいくつかならんでいるが、生きた人間がいればなんらかの行動を起こしてとくに部屋から出ていくだろう、と南條はあえてその扉の先を見なかった。その先がまたどこかへと続く可能性だつてあるが、南條が始めにいた部屋の出入り口であった扉とデザインは全く変わらず、ココに何か『実験的』な、『施設の』な雰囲気を感じ取ってからは、あの扉は個室だ、と思つて時間を無駄にしない行動を取っているのだ。

ここがどこで、地上なのか地下なのか分からない状況で、やっと南條は一つの発見をする。

「……………あ、ど……………つて……………よ」

不意に、聞こえて来たその『声』。いや、声とも呼べるほどにハッキリとは聞こえない。が、それは声だと南條は信じた。

「あ？ 声？」

どこからともなく聞こえて来た声に反応し、一応に辺りを一瞥するが相変わらずの光景が続くだけで何処かに人影があつたりなどはない。見える範囲での可能性言えば、廊下に並ぶ扉の先であるうか。

と、いつでも廊下に並ぶ扉は見えるだけも一。近くある。

それを一個一個開けて確認するよりは、

「誰かいんのかアッ!？」

顔を見る限りは外国人だ。

が、そんな事よりも、

「な、なんだよソレ……」

南條は部屋の光景を見て思わず絶句した。

部屋の大きさは南條が目覚めたソレよりも少しばかり広いように感じる。

部屋を中心にブロンドの少女が座り込み、血まみれの燕尾服を着た初老の男性を抱きかかえている。見るからにその血は初老の男性の物だ。少女のドレスにも鮮血がべつとりとこびりついているが、それも恐らくは男性の物で、少女に傷はない様に思える。

（な、何がどうなってやがる！？）

少女に抱かれる男性は明らかに『死んでいる』。手当てしても助からない状態、ではなく既に絶命しているのだ。勿論、南條は死体なんて見たことはない。が、それでも見て『死んでいる』と分かる程の状態だったのだ。

南條が鮮血の臭いに当てられ、考えをとめて金魚の様にただ口をパクパクと開いていると、不意に少女の顔が上がって、

「助けてよ……」

すすり泣く声でそう『命令』された。

少女の顔は精巧に作られた人形の様に整いすぎていて、良い意味で南條は同じ人間とは思えなかった。初めて芸能人を生で見たときのような気持ちがある状況ながら僅かに心を躍らせた。巻き毛の金髪は空気よりも軽く感じる程にふわふわ揺れていて、思わず手に取りたくなる。透き通った真つ白い肌は西洋人を連想させる青い瞳とブロンドによく似合っていた。

——一言、美女だった。

その潤んだ瞳に見つめられて、南條は思わず怯んだ。
そんな南條を急かす様に、

「助けて！」
美女の声が部屋に轟いた。

2・接触―1（前書き）

南條来人、謎の施設内を探索。ブロンドの少女と出会う。

2・接触―1

少女の叫び声で南條はハッと我に返った。呆然とした意識が戻り、白濁に吞まれていた視界が鮮明さを取り戻す。

「助けてよ……」

目の前のブロンドの少女は血まみれの男性を抱きかかえたまま、視線を膝へと落として弱弱しく吐く。それはもう、死んでしまうかと思う程に。

「あ、ああ。おう……」

困惑しながらも南條は駆け寄り、少女の側でしゃがみ込んで目線を合わせる。同時に、少女に抱えられる男性の死体から溢れる鮮血の鉄臭さが南條の鼻に付いた。良い思いなんかするはずもなく、南條は無理に意識から外す。

「お、おい。何がどうなってやがる……？」

目の前で俯き、ボロボロと涙を溢れさせながら泣く少女、そして抱きかかえられている謎の初老の男性の死体。

南條が必死に問うと、少女はその歪ませてなお綺麗な面持ちを上げて、訴えるように言う。

「ノーツが死んじゃったの……」

嗚咽交じりではあるが、しっかりと南條には届いていた。

（ノーツってのは、この死体か……？ この状況じゃそうとしか考えられないか）

間近にある死体からすぐに視線を上げて少女へと戻して、南條は問う。

「なんで……、その、ノーツ？ は死んだんだ？」

まずはこれだ。状況から見てこの少女も南條と同様に『いつのまにかココにいた』可能性が高い。現時点ではそうとしか考えられないくらいだ。そんな状況で少女も抱いているであろう「ここはどこ

か？」や「何故ココに？」なんて疑問をぶつけた所でまともな答えは期待できない。と、なるとまずは目の前にある一番目立つ問題からハッキリさせていけば良いのだ。

南條が問うと、少女はその華奢な身を僅かに震わせながら、

「バ、バケモノ、……が、」

「は？ バケモノ……？」

少女が吐き出した小さな嗚咽交じりの言葉に南條は思わず頓狂な声で返してしまった。それがこの状況に混乱し、困惑して落ち着けない少女の気に障ってしまったのだろう、

「そうよ！ バケモノよ！ バケモノがいたんだから！」

少女はすぐ目の前の南條に向かって苛立ちをぶつける様な必要以上の大声で怒鳴った。あまりの大きさに南條は一瞬だけ身を怯ましてしまう。

驚いた、正直に南條はそう感じた。

目の前の少女はこんな渦中においていかれているせいか、完全に弱りきっている。こうやって一応ながらの会話ができるだけマシだといえる様な状況で、未だ正気を失ってはいない。死体を抱きしめ、敵か味方かも分からない南條に助けを求めている。必死に自我を保ち、目の前に現れた南條に縋っている。恐らくは、

（こいつ……！？ この死体まだ生きてるとでも思ってたのか！？）

この少女は『ノーツ』とやらを助きたいがために南條に縋ったのだろう。

ノーツを助きたいがために狂っても可笑しくない状況でただ必死に助けを求め、——その他の記憶が混乱しているのだろう。だから『バケモノ』なんて『信じられない事』を吐いたのだろう。

南條もそう思っていた。

バケモノ、なんて空想上の生き物に過ぎない。ましてや生き物だとすら言い切れない様な曖昧な存在だ。

仮に現実存在するモノをバケモノと形容するとして、どんなモノが思い浮かぶだろうか。野生の猛獣だったり、狂ったサイコパス

だったり、考えればいくつかの答えを得る事は出来なくはないであろう。だが、それをまずこの状況でバケモノと表すのだろうか。

ひとまず、少女がノーツの状態に気付いているかどうかは置いておいて、南條は問う。

「バケモノ……って、なん、」

言いかけて、気付いた。

（あれか……！？）

そうだ、南條は先程まさにバケモノと形容できる存在と対峙したばかりだった。

臓物を露出した狂った様な中年男性。バケモノ、と例えてもなんら不思議ではない。

「ゾンビよ！ あんなの決まってる！！ 『ゾンビ』だったのよ！！」

（ゾンビ……！？）

南條は言われてみて嫌な記憶を掘り起こす。

僅かな瞬間での出来事、とても信じられる様な光景ではなかったがハッキリと思い出せる。あのイかれた表情にはみ出した腸。言われれば、ゾンビ、まさにソレだ。

が、『ゾンビ』なんて存在、まさにバケモノと同等のファンタジーな存在だ。映画やゲームで登場し、人を襲い喰らう生きる屍。

そんなもの、南條が信じられるはずがなかった。いくらそれらしきものを見たといえど。

（こいつはあのおっさんを見てゾンビだっと思ってるのが……？）

少女は僅かに正気を保っているが気が動転しているのは確かだ。

そう考えて当然だろう。

とりあえず、と、

「分かった」

肯定する。相手を逆撫でしない。それがまず第一に必要な。そこまで考えれるあたり、南條は少なくとも目の前の乗除よりは冷静だと言える。

続けて、

「逃げよう」

これ、これだけしか言えなかった。

少女より冷静だといっても南條も困惑しているのは事実だ。

全く知らない場所にいて、腸を垂らした男性に襲われかけ、死体を見る。こん状況でまともなままでいられる人間なんてそうそういない。

「とりあえずココから逃げよう。ここは何がなんだか分からない。だがよ、ゾンビなりなんりのバケモノがいて、人を殺すのは間違いないんだ。だから、命ある内に逃げよう」

あえて少女がかかえるノーツへとは目をやらず、南條は視線をしっかりと少女に突きつけて、くさびまで打って、そう言いきった。

南條がここに到達するまでで異常なモノはあの中年男性以外見ていない。少女の言葉のバケモノ、ゾンビを別と考えてもそんなモノと会おう分けがない。南條はそう思った。

だから、言い切った。

逃げよう。少なくとも南條と少女は生きている。それに恐らくは似たような境遇だろう。ならば、無駄に会話を重ねて意味不明な真実を掴もうとするよりは逃げてまず安心を手に入れたほうが良い。

だが、

「嫌……」

「は！？　なんで!？」

少女は拒絶する。それに対し、南條も思わず驚いて声を上げてしまった。

同時、シャツ、と南條の背後で鋭利な音と共に部屋の扉が開いたのだが、南條はすぐには気付かなかった。

「え、あ……」

南條の目の前の少女はそれに気付いた。

思わず面を上げて視線をそちらへと釘付けにし、絶句した。目を見開き、恐怖から口は開くが言葉は一切出てこない。まるで、そう、

バケモノと対峙でもしたかの様な表情だった。

「ん？」

暫く、という間もなく南條は少女の様子に気付いて小さく唸る。

そして、視線を辿って――振り返る。

部屋の扉は自動式の物だ。それは南條が入ってきた時に全て証明されている。もとより、自動であろうが手動であろうが扉が開くためには、開ける人物が必要なのだが。

「ああああアアああああオオオオアああああアアアアアアアああああ」

呻き声が、狭い部屋中に反響した。

2・接触―2（前書き）

南條来人、謎の施設で少女と合流。
少女、南條と合流。

2・接触―2

「ッ!」

言わずもがな、振り返ればそこにバケモノの姿がある。

あの時対峙した中年男性とはまた違う、今度は青年と呼んでも間違いいにはならない若さが見える男性だった。白めを向き、不気味な呻き声を上げ、南條達にゆっくりと迫ってくる。

その姿に違和感がない分けがなかった。見れば、先程の露出した腸よりはインパクトはないが、腕の肉はナイフで丁寧な削がれ落とされたかの様になくなっていて、そこには本来見えるはずがない僅かに肉がこびり付いた真つ白な骨が見えている。

とてもじゃないが常人が見て落ち着いていられる光景ではなかった。

勿論、南條は絶句してしまっているし、少女も同様だ。

「ああああああああアおおおアおおおああああああアアアアアああ」

「なん——ッ!」

南條は立ち上がるも、足が竦んでしまって上手く行動できない。それに頭も回らず、混乱した状況でどう動いていいか、何をすればいいかなんて考えつくはずがない。

「バ、バケモノオ!」

南條の後ろで少女が悲鳴を上げる。が、南條の脳はそれを理解するまで状況に追いついてなどいない。

（なっ……! さっきのおっさん以外にもまだこんな死体みたいなのがいたのか!）

見れば見るほど『ゾンビ』と形容できてしまうその姿から、つまりは現実から目を背けたかった。

——が、そうはいかない。

明らかに危険な対象が自分達に向かって来ているのだ。ここで素直に「はい」と受け入れる馬鹿はいない。

逃げるか、戦うか、その他ない。相手はどう見たって話を通じない種類の人間だ。それどころか、人間かどうかも怪しいバケモノだ。平和調停を結べるはずがない。

——どうする？　なんて考える余裕はなかった。

「オオオオオオオオオオオ！」

南條は考えるよりも前にまず行動した。目前まで迫ったバケモノお懷に飛び込み、懇親のタツクルをかました。

突き飛ばして、少しでも時間を稼がなければならない。なぜなら、南條のすぐ背後に少女がいるからだ。

南條の頭に、『少女を置いて逃げる』なんて考えは当然の如くなかった。

ドッ！　と南條の六。キ口弱の体重が乗せられた懇親のタツクルがバケモノの腹に衝突する。一応ながらに肘も鳩尾に叩き込んだ。

——だが、

「おおおおオオオ、アアアアアアアアアあああああ！」
南條とバケモノの距離は一ミリたりとも開きはしなかった。

（こいつ、硬い……！）

鳩尾に肘がめり込んだ感触は南條は確かに感じていた。だが、まるでコンクリートで塗り固められた分厚い壁に突っ込んだかの如く、目の前のバケモノは一步たりとも後ずさりしないどころか、上体をそらしたりすすらしなかった。

まさに、バケモノ、だった。

「くっそ！」

南條が面を上げると、バケモノがゆっくりとその手を振り下ろし、掴みかかってこようとしていることに気付けた。

「あぶねえっ！？」

ほぼ自然的な反射で南條はサッと後ろに飛びのいてそれを交わした。

考えずとも、先程の体験によって、このバケモノは力が強い、と本能が勝手に判断し、より一層の危機を感じての行動だ。

「おい！ 立て！ 逃げっぞ！！」

南條は首だけで振り返り、未だノーツを、死体を抱きかかえたまま宝石の様な涙をボロボロと流し続ける少女に叫ぶ。

彼女は『嫌』と逃げる事を拒んだ。だが、こんな状況でそんなことを聞く余裕はない。無理矢理にでも引っ張って、逃げるべきだ。南條はそう思っている。

「アアアアアアアああああオオオああああアおおオアアあああ」

バケモノは非常にゆったりとしたペースで迫っているが、何分距離がない。早く行動を起こさなければ、二人ともノーツと同様の状態にされてもなんら不思議ではない。

「うつうつ……、うつ……」

少女はすすり泣くだけで返事を返さないし、勿論立ち上がるうとはしない。

「糞ッ！」

こうなると、南條が取れる行動は一つしかない。

南條は即座に振り返り、強引に少女の手を取って立ち上がらせる。勿論、こんな状態の少女が南條の、男の力に逆らえる分けもなく、少女は立ち上がらされた。同時、分かりきっていた事ではあるが、少女の懷からノーツの身体が、ボトリ、と、まるで臓物が叩きつけられるかの様な悪寒が走る音と共に落ちた。

南條はその先を見て、思わず一瞬足を止めて、絶句した。

床に落ちたことによつてうつ伏せに転がったノーツの死体。それは、余りにも酷い姿だった。

背中、と例えられるモノなんてどこにもない。少女が抱きかかえていたために気付かなかったが、ノーツの背中は無理矢理剥がされたかの様になくなり、中身を露出させている。それどころか、その中身さえも所々失われていて、その先に守られているはずのモノが

ありとあらゆる「穴」からまるで触手の様に露出していた。

「う……グッ……!!」

理解してしまった瞬間、強烈な、この世の感覚とは思えないほどのおぞましい吐き気が南條の腹から食堂を登ってきた。背筋にドラアイスでも突っ込まれたかのような悪寒が全身を脅す。

だが、ここで怯むわけにはいかない。

「ノーツ！」

少女が叫び、南條の手を振りほどこうとするが南條は阻止する。ここで手を離せば、『二人とも』命はないだろう。それだけは、どうしても阻止しなくてはならない。

ゾクゾクと背筋を震え上がらせ、こみ上げてくる強烈な吐き気に堪えながらも、南條は必死になって少女の手を離さなかった。決して、離さなかった。

「いやあああああああああああああああああああああ
ああああああ！」

南條が駆け出すと同時に、少女の痛烈な悲鳴が耳を劈くが、耳を塞げば手を離してしまふ。と、南條は堪え、少女の手を握り直す余裕もなくバケモノの脇を素早く抜け、部屋から飛び出した。

2・接触―3（前書き）

南條来人、少女を連れて施設からの脱出を目指す。
少女、南條に無理矢理連れられ施設脱出を目指す。

2・接触―3

「離してよ！」

「うるせえ！　もうちょっと待てやコラ！　距離稼いどかないとマズいつての！」

少女を無理矢理連れ、どちらが出口かも分からないこの謎の施設を走り回った。

とりあえずはあのバケモノから離れなければ、南條はその考えだけを頼りに必死に走った。

少女に気を回す余裕はないが、極小の、あるかないかの余裕全てを少女に回して出来るだけ気を使う様にはしていた。勿論、少女はそんな気遣いには微塵も気付いていないし、関心がないのだが。

暫く、数分程施設内を走って二人はとにかく近くにあった部屋へと飛び込んだ。

自動式の扉を潜った先にあのバケモノがいないのは運が良かったとしか言えない。

二人が飛び込んだ先は先程か度々確認できる小さな六畳程の真っ白な近未来的デザインの部屋だった。二人以外に存在する物は何もない。

「もう！」

腕を振って、南條の拘束から少女はやつと解放される。

涙を目に溜め、顔を真っ赤に染め上げて怒り心頭だと明らかに分かる表情で少女は今にも飛び掛らんという様子で南條と向かい合った。

「無理矢理連れて来たことは謝るけど、ああするしかねえのは分かっただろ？」

流石に少女の鈍い判断能力に苛立ちを覚えてしまったのか、南條も少しばかり怒鳴る様な口調で言った。が、少女はそれに対して全

く怯む様子も見せず、

「ノーツを助けに行くの！」

怒鳴る。が、あまりに容姿端麗なためか、飼い主になつかない子犬の様に見える。

勿論、一九歳にもなる一男子の南條がその程度の迫力に臆するわけがない。

「アホか！ 大体アイツは死んでんだろっが！」

「死んでない！」

「……ッ！」

「死んでないのよ！」

少女はまるで真実を語るかの様に主張した。

勿論、『あんな状態』の人間が生きているわけがない。

素人の南條が見ても一目で「死んでいる」と分かるような状態だ。それも、あの背中を見ずとも、だ。そんな人間を生きている、と言いつ切る程に少女は錯乱し、衰弱しているのだろう。

「どいて！」

少女は無理矢理に南條の横を抜けて部屋から出ようとする。が、勿論南條はソレを許さない。少女の前に立ちはだかり、決して隙を見せず、行く手を塞ぐ。

「どかねえよ！ 絶対に行かせはしねえ！ 少しは冷静になれってんだ！」

「うるさい！」

「うつせえッ！」

両者譲らない。譲るわけがない。

少女とノーツがどのような関係なのかは分かりはしない。だが、親密な関係だったと伺えるほどに少女はノーツを助けに行こうと必死だ。死んだと信じず、現実から目を背ける程に。だが南條も負けはしない。本人が思う程には南條は冷静だ。少なくとも、少女よりは。そんな南條が自ら命を投げ出そうとしている少女を止めないわけがない。たとえ、つい数分前に出会ったばかりで互いに名前も知

らないような関係でも、目の前で失われる命に救いを与えないわけがない。

「とにかく、落ち着け！ 『あいつの背中見ただろうが！』」

南條は今までこんなに声を上げたことがない、と思う程に声を張り上げて怒鳴っていた。

「……………」

しまった、とは思はした。

が、どうやら効果はあったらしい。少女は突然俯き、黙った。

（何とか、落ち着いてくれたか……？）

少女の様子を伺いつつ、南條は自分を落ち着かせるための溜息を吐き出す。

「……、ノーツ、死んでた……」

不意に、少女の口からそんな言葉が漏れる。

とても小さな、人に向けて言うような声量ではなかったが、目の前で少女の様子を伺う南條は聞き逃さない。

「そうだ。けどお前は生きてる。何があったのかは知らないけどよ、生きてんだ、こんな状況だったのに。呆れちまう様な意味不明な状況だけとお前は間違いなく生きてる。こんな意味不明で理不尽で危険な状況で、…… 厳しいこと言うけど死体に構ってる余裕なんてないんだ。それじゃお前が死んじゃうだろうが。俺だって生きてる。生きて、お前を見つけた。俺にはお前を守る義務がある。人間だから、だ。俺も人格者なんかじゃねえ、お前が死ぬって言うならもう止めない。けどな、あん時のお前は明らかに錯乱してた。そりゃまともな意見、意思なんて聞けない程にな。だから、助けた。出来れば助けた命を無駄にしないで欲しい」

南條自身でも驚くほどに言葉が吐き出せた。

少女に生きて欲しい。ただ、そのみつともないくらいに必死でありがた迷惑かもしれないその思いが、南條を良い意味で饒舌にさせた。思いを伝えた。

「……………」

少女は睨む様に、南條を見つめている。

未だ困惑はしているのだろう。南條だって冷静といっても困惑はしている。先程まであれだけ狂ってしまっていた少女がすぐに完全な落ち着きを取り戻せるはずがない。当然の事だ。

「まあ、無理強い、は、しない、けど……よ」

返事がなく、二人の間に沈黙が走ったのが妙に恥ずかく、南條は戸惑いながら、何か場をごまかすようにそう言った。

南條が困って、言葉を必死に探していると、

「……ディエナ、」

少女は本当に目の前の南條に聞こえるか聞こえないかのギリギリの音量で呟いた。

「ディエナ……？」

訊くと、少女は頷いて、面を上げる。

必要以上に整った精巧に作り上げられた人形のような綺麗な顔が南條と向き合う。ブロンドの巻き毛が揺れ、甘ったるい、だがこころ良い香りを南條にまで感じさせる。

そんな絶世の美女と称してもなんら不思議ではない少女の、仄かに赤らむ薄い唇が開かれる。

「ディエナ・トワイライト。私の名前」

「……、ディエナ、か」

聞いて、やはり外国人だったか、と南條はディエナのその美しさに一人で納得して心中で幾度か頷く。

（日本語は大丈夫、か。今更だけど）

「じゃあディエナ」

「……何よ？」

ディエナの態度は未だ南條に対して警戒している事が伺える若干ツンとした強気交じりの態度だったが、南條は意識的に気にしない様にした。

「何があつたか、教えてくれないか？」

聞くと、

「……………」

何故か少女は黙ってしまふ。

「やっぱり思い出すのは辛いかな？」

南條の見たノーツの状態は最悪だ。それも、ちよつとやそつとの事故や犯罪では見れない様な、それ程の最悪の状態だ。あれ程の状態になったということは間違いなく強烈な事があつただろう。思い出したくもない程の事が。

「違う」

「へ？」

だが、少女は首を横に振つた。

どういうことだ？ と首を傾げる南條に、少女はそのガラス球よ
うな瞳を向けて、

「名前は？」

聞いた。それはもう、こんな状況下にいることを忘れてしまふか
の様な、初対面の気軽な、挨拶だつたかと思う。

「南條来^{なんじょうきこ}人、だ。呼び方はなんでも良いから」

「来^{きこ}人、ね。わかつた」

2・接触―4（前書き）

・南條来人、ディエナ・トワイライトと合流。

2・接触―4

南條とディエナ。二人以外何も存在しないこの小さく、不気味なほどに静かな部屋でディエナは何度か頷き、やっと、話してくれた。「私とノートは二人でショッピングに出てたわ。……、何処までの記憶があるかって言われたら曖昧なんだけど、気付いたら、こんな変な所にいたの。やっぱり、記憶がはつきりしないから言い切れないけど、ノートは拉致を疑ってたと思う。でそれで、私達……、半分以上はノートの指示ね。ノートが『ここから出なければ』みたいなこと言って私を守りながら部屋から飛び出したわ。けど……、廊下あのバケモノと会っちゃって……。それで……、」

「そこまでで良い」

「……ありがとう」

つまりは、ディエナも南條と同じだという事だ。

（やっぱりそうか……。と、なると得られる情報なんて大してないよな）

南條が一人考えていると、目の前のディエナは首を傾げて、

「来人は？」

言われて、ハツとして南條は一旦考えを止める。

「ああ、似たようなモンだよ。俺は……、」

言いかけたところで、南條はまた別の事を考えてしまう。

――何をしていたか。だ。

記憶がはつきりしていないのは確かである。

（俺は……、何をしていた？）

考える、が、未だ記憶はハッキリとはしない。何処かで『誰か』と出ていたような気はしている。だが、南條はその詳細がハッキリとしない。磨りガラス越しに景色を見るような、そんなあやふやな記憶が南條の脳裏にぼやけたまま流れる。

（何があつた……？）

ともかく、思い出せないので仕方なく答えられる範囲での一応な答えを南條は返す。

「俺は、……俺も、気付いたらこんなところにいた」

あえて短く、簡潔に答えて南條は自然な動作で視線をディエナから外して床に落とす。

思い出せないことが何故か申し訳なく思えて、そんな南條の無駄な罪の意識の表れだったかもしれない。勿論、ディエナがそんな事に気付くはずもないのだが。

「そっか、」

自身が悪い訳でもないのにディエナは申し訳なさそうに溜息を吐く。

南條同様に、ディエナも何か意味のない罪の意識を抱いてしまっているのかもしれない。この様な状況で、こうやって話合える相手を見つけただけでも運が良いと言える。こんな状況で、他に人間がいるかも分からないこの状況で、相手と離れてしまうのは好ましくない。だからか、二人とも意識せずどこか億劫になってしまっているのだろう。相手に無駄に気を使って、自身を抑えて相手に合わせようと。勿論、それでは先に進めない。

「と、とにかく！」南條自身を奮い立たせる様な必要以上の大声で、俺達はここから出なくちゃならねえ。生きるために」

聞くと、ディエナは先程まで見せていた困惑した様な様子を全く伺わせない予想以上にしっかりとした面持ちで一度、一度だけしっかりと頷いて返した。

南條も気付いてはいるが、これはきつと一時的な強がりでしかないだろう。が、それでも今は十分なモノだと思えた。先程までの冷静さを失ったあの様な態度のままではきつと——二人とも死んだ。

「とにかくにも逃げるしかない。お互いに勝手にここに連れてこられたって事は情報なんてないだろうしな。ただ走るのみだ」

「そっね」

そう言うディエナの目には何か決意が表れていたかもしれない。
かくして、二人は協力関係を結んだのだった。

——これが、これから始まる戦いの始まりとなるとは、誰も思い
やしなかった。

1

「やっと……、景色が変わった……か？」

「……少なくとも、今までと何か雰囲気が違うわね。言い切れない
のが残念だけど」

南條来人、ディエナ・トワイライトの二人はひたすらに謎の施設
内を走り回った。走り回って、同じ景色を幾度となく走り抜けて数
十分程して、二人はエレベーター見つけた。真っ白な壁に同化する
様な扉だったため、見づらかったのだ。気付いて、乗り込んで数階
程降りたその先。

二人の目の前には相変わらずの光景。眩いばかりの真っ白な廊下。
エレベーターを降りた二人から真っ直ぐ前に伸びる廊下、だが、
その光景は今まで見てきたモノとは少しばかり違う様に感じた。感
じていた。

エレベーターから真っ直ぐ伸びる廊下、その先にが三本の新たな
道が伺える。右に左に、それと真っ直ぐ。唯一先が見える真っ直ぐ
の伸びる道、その先には何かシャッターの様なモノが見えるのだが、
余りに距離があるためにハッキリと何があるか、と確認はできない。
とりあえず、と二人は先に警戒しながら分かれ道の場所まで進む。
「扉、扉、シャッター……？ いや、なんか広い空間があるな」

とりあえず、と分かれ道まで来たところで南條はそれぞれの道の

先を確認した。右に伸びる道の先には今まで見たモノと同様の近未来的デザインの扉が確認できた。今までの感覚からしてその先は部屋だと南條は予想するが、その先が通路なのか部屋なのかは実際に確認してみないと分かりはしない。

そして、左の通路の先も同様。

問題はそのまま二人が真っ直ぐ進んだ時、どうなるか、だ。

真っ直ぐ伸びる道の先には扉なんか見えやしなかった。

その先には、体育館程の巨大な空間が広がっているのが見える。相変わらずの真っ白な空間ではあるが、明らかに今までとは違う空間である。その先にシャッターのようなデザインで、明らかに今までとは違う扉も確認できる。

「ど、どこに進もうか……？」

「そうね……、」

明らかに怪しく思えるのは真っ直ぐ伸びる巨大な空間に繋がる道だ。だが、先の光景を知らない以上はどの道も怪しく思えてしまう。ここで、南條は考える。

ここに辿り着くまで、運良くあの『バケモノ』に会わなかったが、いつ出現しても可笑しくはない状況である。もし、左右に伸びる道の先、その扉の先が逃げ場のない空間だったら？ 真っ直ぐ伸びる廊下しかないこの状況では逃げ切れないだろう。バケモノがソノ名の通り、バケモノ染みた力を持っているだろう事は南條達は気付いている。

だとしたら、答えは一つしかない。

バケモノが襲って来ても逃げ場の確保がほぼ確実にできるであろう広い空間を持つ、真っ直ぐ伸びる道に行く他ない。

「とりあえず、前進あるのみだ」

南條は自身に言い聞かせる様にそう言い、ディエナと共に歩き出した。

2・接触―5（前書き）

・南條来人、ディエナと共に巨大空間にて。

2・接触―5

「本当に、ただの巨大な空間、ね」

ディエナは呆れた様にそう吐いた。二人は真っ直ぐ進み、ソノ先に見えた巨大な空間へと出たのだった。

「一応気になるのはあの『扉』くらいか」

南條は先を指差して言う。

二人が立っているこの空間の入り口とも呼べるその位置から正反對の位置に、今までの物とは明らかにデザインが違う、シャッターを連想させる様なデザインの扉が一つだけ確認出来た。それ以外には、今まで入った部屋同様に何も確認できない。

この空間に出るまでは見えない、確認できない所に何か潜んでいるのではないか、と億劫になって必要以上の警戒をしていた南條だったが、いざこの空間に出てみると、ホッとした、と言わざるを得なかった。

本当に、何もない空間だ。ただ、巨大なだけで、今まで確認した小部屋となんら変わりはない。

「とりあえず、あの扉だな」

「そうね」

互いに確認しあつて、その扉へと向かおうと一歩踏み出した――その時だった。

二人の背後で鋭利な空気を切る様な音が微かに鳴った。あの、近未来的デザインの今まで見てきた扉が閉まるかの様な、そんな一応に聞きなれた音だった。

そんな音だろうが何だろうが二人には関係ない。何かが起きれば、確認しなければならない様な状況だ。

二人はまるで打ち合わせしていたかの如く同時に音に反応し、振り返った。

振り返って、一目で何が起きたのか確認できた。それもハッキリ、

と。

「道が！」

まずディエナが声を上げた。

その言葉の通り、南條達がこの空間へと出るために通ったその廊下がなくなっているのだ。それも、最初からそんな通路はなかったと言わんばかりに、二人の通って来た道は『壁』に遮られていたのだ。そう、扉、ではなく、壁、だった。

「くっそ……が、」

こうなると、考えられることは一つしかない。

南條は忌々しげに歯を食いしばって吐いた。何処にいて、誰かも分からない『自分達を監視しているであろう人間』に向けて。

締め出すだけならばこんな仕掛けを作らなくても今まで通りの扉で良い。このレベルの施設を作れるのだ、扉でも十分に何も知らない南條達を締め出す技術を使えるはずだ。だが、あえてそうしなかったのだろう。態々こんな技術を使ってまで南條達を締め出す理由の一つ、一つしか想定できない。

——『畏』なのだと。

「ディエナ、そっちはいいから前に注意しろ！」

「えー？」

通って来た道があつたはずの壁を叩き、無理矢理にでも道を探そうとしていたディエナに南條は叫ぶ。既に南條は前を見ている。言ったとおり、前に注意する様に。

道を塞がれた、という事は『逃げ道を消す』という事だ。と、なると二人を追い詰める何かが出現するはずだ。それは、簡単に予想が付く。

（来るか……バケモノ）

南條が警戒するのは、あのバケモノ、ゾンビだ。

あんな常識から外れたものが徘徊していたのにはきっと理由があるはずだ、と今の南條は考える。

（状況からして、俺達を監視する何かがいるはずだ。そ管理者がい

るつてのにあのバケモノは「ただ、います」なんてなるはずがねえ……、何かを……試してんのか？ この締め出された状況も、すぐに仕掛けてこないところを見ると何かを試してるとしか……」

南條の視線はあの先に見えるシャッターの様なデザインの扉に釘付けた。来た道を失った以上、二人の希望はその扉しかない。

が、言わずもがな、その扉は絶望になる可能性もある。

言ってしまうば確認できる出入り口はその扉しかないのだ。その先から、あのバケモノが複数、それも大勢と呼べる数入ってきたりなんかしたら、もう南條達は逃げ切れないだろう。

南條達が閉じ込められたとはいえ、目的は『殺す』ことではないのだろうか、しばらく南條達が警戒しても背後の来た道が失われた事以外に何も起こらなかった。

「何も起こらないわね……？」

「そうだな……」

（と、なると一つしかねえ……）

来た道を絶たれたのだ。となると答えは一つしか選べない。

「あの扉、開けるしかないよな？」

南條は息を呑み、ディエナに振り返らず問う。

「そうね……。他に何も無いものね……」

「だよな。……よし、進もう」

他に何も無いのだから「仕方がない」と南條とディエナは辺りを一応に警戒しながらまた一歩踏み出した。

が、またしてもそれ以上進むことは叶わなかった。

南條様々な可能性を考えつつもりでいたが、一番簡単なことを逃してしまっていたのだ。それは何か？ 答えは簡単だった。

——何故、これ程までの巨大な空間なのか。だ。

今まで同じ道を散々通つてくuraiにはこの施設内を走り回った南條達。その南條達が違和感を覚えるほどに、この部屋は巨大なのだ。

体育館を連想させる様な巨大な空間。天井は白い一面のせいでハッキリと確認できなかったのだが、心なしか南條は「高い」と思った。その天井が、動きを見せた。

まるで何かを『落とす』かの様に、天井は外に、南條達のいる方へてパツクリと割れて開き、『ソレ』を南條達の目の前に落とした。

「なッ!？」

「きゃあああああ！」

ソレが床に着地したと同時に、強烈な地震が起きたかの如く床が、
 こころ一帯が激しく縦に揺れた。

南條とディエナはしゃがみ込み、その揺れに堪えて体勢を出来るだけ保つ様にした。勿論それは、自然反射ではあつたのだが、それよりも、目の前に落ちてきたソレに警戒しての事だつた、といったほうが正しい。

「才才才才才才才才才才才才才才才才才才才才才才才才才才才才才！！」

ゆれが収まって、南條達が立ち上がるうとしたと同時、分厚い、まるで巨大な鐘を打ったかの様な雄叫びがこの巨大な空間に揺れ、反響して二人に襲い掛かった。

2・接触―6（前書き）

・南條来人、ディエナと共に怪獣と対峙。

2・接触―6

「はあああああ！？　ありえない！　絶対ありえないじゃねえかよコレ！」

南條を表現した冷静なんて単語は決して誇張した物ではない。が、そんな南條でも思わず、無意識の内に声を上げてしまっていた。それ程までに、異様な『ソレ』が目の前に突如として現れたのだ。

ディエナは南條の横で絶句している。様子を見るまでもないが、正直、意識が飛ばない様に目を見開いているだけで精一杯なのだろう。南條の背後からは、何一つ音はしない。

二人のすぐ目の前には、丸太の様に凶太い、野獣を連想させる茶色の剛毛に覆われた足が二つ。見上げれば、二人を覗き込む巨大で、真っ赤に充血した瞳。

顔は蝙蝠（こつもん）、図体はまさに『怪獣』、手から伸びる爪は一つ一つが日本刀を思い出させるかの様な鋭利で、それなりの長さを誇っている。まさに、怪獣だ。バケモノ、なんて表現ではとてもじゃないが当てはまらない。巨大な、バケモノだ。

全長三メートル程だろうか、開いた天井が元に戻ろうとした時、その怪獣の頭上スレスレを通ったのが見えた。

そして、天井が元に戻った。同時、地を僅かに揺らしながらその凶太い足がゆつくりと持ち上がり――二人の頭上でピタリと静止した。足の裏には肉球らしき物が見て取れるが、その大きさは今まで見てきたモノとは比べ物にならないくらい大きく、単（ひく）に想像できる肉球を持つ動物のソレと同じ物とは思えない。

「よ、よよよよ！！　よけ……、飛べッ！！」

ひい！！　と南條は回らない頭で必死に言葉を摘んで選び、叫んだ。斜め後ろで動けなくなっているディエナを突き飛ばした。同時に南條も結ばれてしまいそうな程にぐにやりと揺れる足にシッカリと

力を込めて、突き飛ばしたディエナと同じ方向に飛びのいた。その、すぐ直後。

南條達がいた場所が、消え去った。

そこには剛毛に包まれた図太い足が自分の敷地だと言わんばかりに鎮座している。

（いつ……、あんなのに踏まれたら死ぬとか生きるとかそんな問題関係なしに存在が消されるっての！）

「立て！」

「きゃああ!？」

南條は咄嗟にディエナの手を取って二人で立ち上がる。立ち上がり、――走る。

(と、とにかくどこか避難できる場所——ツ！?)

数少ない余裕で辺りを一瞥する南條。が、一瞥しなくても分かる来た道はふさがれ、唯一の道は先程から逃げも隠れもせずバケモノの足のように鎮座している。

（とりあえず……あの扉に賭けるしかねえッ！！）

[illegible]

南條は叫んだ。自身を奮い立たせるために。

南條のリードで二人はしっかりしない足取りで走る。

その後ろで、怪物がゆつくりと振り返り始めたのに二人は気付けない。気付く余裕はない。二人はとにかく扉を目指して走り、早急にそこに到達するしかないのだ。

だが、怪獣なんかを相手にしてそんな上手くいくはずがない。なかった。

数十メートル先の扉を目指して走り出した二人。南條がディエナの手を引いて全力で走るその光景が、一瞬で吹き飛んだのだ。

┐
^
?
└

ディエナも思わず頓狂な声を上げてしまう。それ程、僅かな間、一瞬、の内に起きたのだ。

ディエナの目の前にあったはずの南條の姿が、消えた。

そして、代わりに立ちはだかるのは怪獣の鋭利な爪。鈍く輝くその爪に血はへばり付いていない。見当たらない。が、それ程綺麗に南條の身体を叩ききってしまったのかともディエナは思ってしまう。
「へ……。え、あ……。」

リードしてくれていた南條の姿を探すが、怪獣の影にでも飛んではまったのか、それとも木っ端微塵にでもされたのか、ちよつと辺りを見回した程度では見つける事はできなかった。

（な……。来人はどこに……。）

最早ディエナに『逃げる』という選択肢は浮かんでこない。

あまりに南條に身を任せすぎたのだ。もとより、任せていなければディエナはとづくに死んでしまっていただろうが。そんなディエナに自身で『逃げ出す』なんて考え付くはずもなければ勇氣もないだろう。事実、ディエナは視線を水平に移動させるだけで動こうなんてしない。それに、見れば見るほど今にも倒れてしまいそうだった。

元々、限界寸前だったディエナの気を保たせて引きずってでも『生かそう』としたのは南條だ。

その南條がいなくなった、ということとは――。

ゆつくりと、目の前で怪物の何かが蠢く。が、ディエナの視線はそれを追いかける事はできない。出来るはずがないのだ。脳が活動を静止しているのだ。どうしようもなく、ただ犠牲になるだけのためにここに置かれているオブジェクト。今のディエナはまさにソレだった。

「あ、あ、あ……。」

気付けば怪物はディエナの正面に立ちはだかり、顔を覗き込んでいた。

「っ」

ディエナは全身麻酔を打たれたかの如く感覚を失ってしまった。

目の前に立ちふさがった知識外の恐怖に本能が震えた。神経を全て引き剥がされたかの様に、身体が脳に存在すら伝えない。

ふらふらと揺れる視界が、ディエナの終わりを告げていた。

（う、動かない……）

ズ、とディエナを覗き込んでいた怪獣の顔が持ち上がり、本来の高さに戻る。同時、当たり前だといわんばかりに鋭利な爪を保持した図太い腕が天井に触れるかと思うくらい的位置まで持ち上げられる。

「あ、あう……、ああ……」

2・接触―7（前書き）

・南條来人、？

2・接触―7

もうダメだ。そう、思った。

ディエナは本心で、自然に、もう続かない、そう思った。何が、と言われて答えるならば、そう――全てだ。

「――っ!!」

ドッ！ と空を切り裂き、全てを叩きつけるかの如く、強烈な一撃が、振り下ろされる。全てを断ち切り、零、へと還元してしまうかの様な、そんな痛烈な一撃。それが、ディエナを叩き潰そうと堕ちる。

その瞬間は体感速度が落ちたのか、とても遅く感じた。声を上げる暇なんてなかった。

「こっちだ!」

――が、諦めない男がいる。

ディエナはハッとし、声のした方――あのシャッターの様なデザインの扉――へと視線をやると、出会ってまだ間もない、だが見慣れた姿の少年が、いた。

「早く!」

「!」

ディエナは声に導かれるままに走り出した。薄手のドレスの裾は自然に破け、ディエナが走りやすい様になっていた。ただ、運が良かっただけなのかもしれない。だが、これは好機だった。

ディエナが走り出した直後、ディエナの背後ではコンクリートを砕く轟音が炸裂し、文字通り砕けた床の破片がディエナの背中を打つが、ディエナは止まらない。止まるわけにはいかない。

そんな光景を見た南條は正直冷や汗が崩壊したダムのように溢れ出

てくるかと本当に焦った。後コンマ数秒ディエナが反応するのが遅かったら、南條の目の前でディエナは身体を粉々にされ、人間としての原型を留めない姿を見るハメになったかもしれない。

「っう!!」

ディエナは足を止めない。

が、目標が動く以上は怪獣も足を止めない。

奇妙な、地を揺るがす程の雄叫びと足音が同時にディエナを追いつ立てる。

「早くッ!! もう少しだッ!!」

数十メートルの距離はあっという間に縮まる。その間、怪獣もゆつくりだがディエナに迫る。

南條は手探りで扉のあるかないか分かりはしないドアノブを探し、掴む。掴んで、押し、開ける。——と、扉は思いのほか簡単に開いた。

早急に開ける。開けて、叫ぶ——ッ!!

「飛び込めええええええええええええええええええええええええええええ!!」

扉の先がどうなってるかなんて確認する余裕はない。南條の視線は向かってくるディエナとそのすぐ背後の怪獣の歪んだ表情に釘付けだ。くさびまで打たれるくらいに。

怪獣の足がディエナの背中を踏み潰すのが先か、ディエナが扉の先に逃げ込むのが先か、といったところだ。

その結果は——コンマ数秒の差で、ディエナが勝つ。

ダッ、と身だしなみなんて気にもしない全身全霊の走り、ディエナは扉の先へと飛び込んだ。同時、南條もしつかりとディエナがその先に飛び込んだことを確認してすぐに続いて飛び込む。

——飛び込む、が、

「ッ!?!」

扉を閉めようなんて思ったのがいけなかったのか、南條の伸ばした左腕に引き裂く様な激痛が走った。まるで、日本刀の切っ先で身

を挟る様な、そんな日常では絶対に体験できない、そもそも体験なんかしたくない激痛。直後に身を焦がす様な熱が左腕を襲う。

(……………ッ！)

だが、南條は諦めない。

怪獣に吹き飛ばされ、平らで、屈強と呼べる程硬い壁に叩きつけられて全身の骨が砕けたかと思う激痛が全身を襲っていても、南條は扉を探してディエナを導く事だけを考えて。だからこそ南條は先に扉の向こうに飛び込まず、ディエナを先に入れて安全を譲った。閉まる可能性のあった扉を開けて、待った。

それほどに、南條はディエナを守ろうと決意していた。

——だから、

「よっしいいいいいいッ!？」

「はぁ、はぁ……、なんとか、なった……わよね？」

バタリ、と扉を閉めて、南條はやつと心臓がはじめてしまいそうな程に跳ねている事に気付いた。深呼吸して、気を落ち着かせたいと思うが、南條はそれよりも前にやらねばならない事があった。

『左腕を背中に戻して隠し』、

「とりあえず、先に行こう。あの怪獣この壁壊してきても可笑しくなさそうだしな……」

「そ、そうね、」

上手い具合にディエナの位置からは南條の左腕が見えなくなっている。だから、ディエナも南條の腕がどうなったかなんて気付けない。例え、その左手の肘から先が三つに裂かれる様に裂傷を負い、ダラダラと真つ赤な血を垂れ流して床に血溜まりを作っていたとしても。

「まあ……、よかったわよね！　なんとかなってるだしっ!」

ディエナは取り繕って言う。

つい数秒前までの現実離れしすぎた記憶を忘れるかの様に、ディエナは言いながら、楽しそうに見せて先に行く。

扉の先は巨大な通路だった。今まで通ってきた細い廊下とは違い、

『通路』と呼べる広さのモノだった。その広さは、何かを搬入する様なイメージを南條に持たせた。

デザインは今までどおりの眩いばかりに輝く真っ白なモノだが、何故だかその先は確認できない。真っ暗、ではなく、真っ白、に塗られた通路の先は進んでみないと分からないだろう。

（周りに扉は見当たらない、い、か……。先に、進むし、か、ない……か）

2・接触―8（前書き）

・南條来人、
？

大量出血のせいで南條の意識はフィルターを貼ったかの様にぼやけていた。はつきりしない意識を覚醒させようと必死に頭を回すが、それすら叶わない。

「……………」

そんな南條に、必死に冷静な自分を取り繕っているデイエナは気付けない。気を回す余裕なんかあるはずがなかったのだ。そもそも、最初からデイエナにはそんな余裕ないのだが。

先を進む力チ力チに固まって錆付いたロボットの様なぎこちない歩き方で歩くデイエナの背中を追って南條は少しだけ微笑んだ、その小さな背中が妙に微笑ましく思えた。助けたんだ、その気持ちが妙にくすぐったかった。

（よか……っ、た。か）

張り詰めた琴線はふとした時にプツリと切れてしまう。

なんとか進んでいたデイエナは、背後で何かが倒れる音を聞いてやっとオートマチックで進む足を止めることが出来た。ついでに、振り返って、やっと南條を確認する事が出来た。

——そして、やっと気付く。

「……………」

振り返ったデイエナが見たのは、うつ伏せに倒れた南條と、その足元からあの扉まで続く川のような血痕。間違いなく、致死量だ。デイエナが見てそう思う程だ。だが、呼吸している様子は確認できる。言っても、高熱にうなされているかの様な荒い、肩でする呼吸だが。「ちよ、ちよっと……、どうしたのよ!？」

へ？ は？ と困惑しながら、おぼつかない足取りと感覚でデイエナは倒れた南條へと近づく。近づきながら、鮮血の鉄の臭いが鼻について現実味を増していく。近づけば近づく程、白い床に靡く赤

い血がハッキリと視界に焼きつきはじめ、頭がクラクラし始める。
「え、嘘……嘘ッ！ どうしたのよ！？」

側にしゃがみ込み、ディエナは南條の背中をゆすりながら通路に反響する大声で南條を呼ぶ。――が、勿論返事は返ってこない。

何故南條がこんな姿になってしまったのか、今の落ち着きを失ったディエナには理解が出来ない。徐々に広がり、南條を沈めるかの様に広がっていく地溜まりの原因が分からない。

つまりは、ディエナの目には勝手に垂れ流されていく血溜まりに南條が赤く染め上げられていく、という以上な景色しか写っていないのだ。果てには、それが可笑しいと認識すら出来ていない。

「ちよつとお！ 返事しなさいよっ！ 来人！」

と、その時だった。

ディエナが待つ南條の返事。ディエナを安心させてくれるであろう南條の返事――の代わりかのように、この先の見えない長い通路に少し竦った声が響いた。

「目標二名、発見」

ハッ、としてディエナは顔を上げて声のした方へと目をやる。

そこには、この真つ白な空間に穴を開けるかの様な、真つ黒な特殊な防護服に身を包んだ数人のガスマスクで顔を隠した謎の人影が確認できた。

「へ？ 何！？」

連中の肩に掛けられた銃がまず目に入った。ディエナにその種類まで見分けることはできなかったが、アサルトライフル、と呼ばれる種類の物であることは素人目でみても一目両全だった。それを、全員が装備している。

（だ、誰だこいつらは……？）

南條は未だ意識があった。勿論、微かな物だったが。

そんな意識のなかで南條は目だけを動かして連中を確認する。

(一、二、……三、四……、見える範、囲で四、人、囲まれて、るな……、背後に数人って、所、か?)

正直、絶望だと思った。どう見たって、この連中は南條達を助けに来たはずがない。そんな連中、ましてや銃なんて初めて実物を見る様な武器を持っているその連中に囲まれているのだ。南條が万全な状態であつてもどうしようもない状況だ。

「報告通り、一名はRZ01による攻撃により負傷。もう一人は無事である」

「早急に回収し、負傷者は研究班に回せ。女の方は『選抜』だ。セカンドさんに回しておくんだ」

ラジャー
「了解」

「おら、とつとと動け!」

意識の飛びかけている南條の意識の端の方で連中がガチャガチャと動き回っている雑音が聞こえてくる。時折、ディエナの物と思われる叫び声、悲鳴も通り過ぎていくが、南條の限界はとつくに越えていた。

(……くそっ)

「『一般』の南條来人、一九歳と『選抜』のディエナ。トワイライト二歳を確保した。直ちにそちらへ連行する」

遠い意識の遠いどこかで、ノイズの走った声が聞こえた気がした。

3 順位（前書き）

- ・南條来人、謎の連中に連行される。
- ・デイエナ、同上。

3・順位

3・順位。

ガコン、という何か重い何かが落ちる様な音で南條は目を覚ました。

「——ッ」

不意に視界が開けるが、相変わらずの眩い光景で目が眩み、しばらくは周りを確認する事もできなかった。目が慣れるまでの間に物音はしないか、と耳を澄ますが特に気になる音はなかった。それどころか、物音自体がなかったかと思える。しばらく瞬きを繰り返し、やっと目がその部屋に慣れてきたところで南條はやつと気付く。

部屋は最初に目覚めた部屋とやら変わりはないその部屋。

だが南條は目覚めたその瞬間から違和感を感じていた。

南條の視界に移るのが真っ白な天井だ。蛍光灯やライトらしき物が見当たらず「どうしてこんなに部屋が明るいのか？」とは思わが、今はそれどころではない。

床に寝かされているわけではない、と気付く。かと言って柔らかな感触のぐっすり眠れるベッド、という訳でもないのだが。南條はその感触や視線の高さからこれが手術台の様なベッドだろう、と予測を付けた。

(……ったく。どうなって……?)

南條はあの怪獣から逃げる時に左腕に重症を負ったのだ、南條自身それを夢だと思わず現実だと信じてハッキリ記憶している。それに、あの真っ黒に統一された防護服を着た連中に囲まれたことも。

——そこで、南條はハツとした。

「ディエナ!？」

そうだ、ディエナもヤツラに連れられたはずだ。起き上がって辺りを一瞥しようとする南條だが、ガコン、という

いかにもな拘束の音がしたと同時に、南條は起き上がれない事に気付く。視線だけで身体を確認してみると、腕ごと胴体を拘束する太いベルトのような物が見えた。よく見れば、足元、首元にもそれはあり、南條をよつぽど逃がしたくないと見える。

南條が視線を下ろした先の南條の足の向こうに、扉が見えた。斜めに開きそうなデザインの最早見慣れた扉。そして、その横に――防護服を着た――影が見えた。

「……！ お、おい！」

「……………」

南條が呼びかけるが、その防護服の人間はなんの反応も示さない。まるで聞こえてない、見えてないと言わんばかりの虫だ。きつと、『上の人間』にでも命令されているのだろう。

「無視すんなつての！ デイエナがどこ行つたか教えるよ！」

「……………」

「ああ、この野郎！ じゃあとつとろ拘束具外しやがれッ！」

「……………」

何を言おうが何をしようが微塵の反応を見せない防護服の人間。

南條はとつとに痺れを切らして今にも防護服の人間に今にも飛び掛りそうな勢いだ、拘束具によって動きを封じられているためにそれは叶わない。

何故、南條を拘束するのか。南條は防護服を警戒しながらもまずそれを考える。防護服の連中は――見て分かるとおり――銃を装備している。一人でもただの人間である南條を拘束するには十分だろう。予備でももう一人、としか考えられない。

拘束するのは何故だ？ 南條を拘束する理由、南條にそれはmだ分らなかった。

とにかくにも、拘束されていては動けない。この部屋にディエナはいず、南條は探し出さなければならぬのだ。

（言ってもきかねえし……どうすっかな）

南條が罵倒しようが叫ぼうが扉の横で待機している防護服の人間

は南條に視線をやることもなければ、手に持つ銃を向けて黙らせようとすらしない。

と、なると、南條は時進んでなんらかのイベントを待つ他ない。勿論、拘束具を外せば話は別だろうが、どうにも、南條の身体を拘束する太い三本のベルトは人間が外せる物とは思えない。それ程に屈強な物だった。

（何にせよ、叫ぶだけ無駄か）

そう、南條が待ちに入った時だ。足元の方からシャツと聞き覚えのある音がして南條は視線を下げた。

南條の足の向こう。防護服の人間が立つそのすぐ横の扉が――開き、人影が一つ増えていた。

（ん？ …… スーツ？）

その人影は場違いなスーツを身に纏った身体の細いラインが目立つ痩せ型の男だった。顔も細く、少しばかり顎が尖っている様な印象を持つ。それに、顔を隠していないせいか、隣に立つ防護服よりも歳を食っている様に思える。顔だけでみて、四十代程だろうか。

その痩せ型の男は、部屋に入ってきたかと思うと、入り口付近に棒立ちして、「調子はどうだ？」と防護服の人間に訊く。返ってきたのは「問題なしです」と、いうありきたりな返事だが痩せ型の男は「そうか」とどこか納得したかの様な様子で返す。

（なんだ……、こいつ。なんか防護服の人間とは様子が違う気がするが、）

スーツの人間は数歩進んで南條の横に立つ。

南條が視線を上げると、その男の嫌に鋭い視線と重なってつい逸らしたくなるが、南條はあえて視線を逸らさない。それどころか睨みつけるくらいだった。

「何だよ、おっさん？」

あくまで、威嚇する口調だ。

「おっさん……、いや、僕ももう四三だ。おっさんでも良い」

痩せ型の男は一人ごとを呟く様にそんな事を言う。勿論、すぐ側

で寝転がる南條には丸聞こえの弦きで、南條は場違いな弦きに眉を潜める。

そんな南條を嘲笑うかの様に、その痩せ型の男が南條の表情を無機質で、冷淡な表情で見下ろしたまま、言う。

「僕は『セカンド』だ。おっさんはやめたまえ」

3 順位 - 1 (前書き)

- ・南條来人、謎の部屋にてセカンドと名乗る男と接触。
- ・デイエナ、？

3・順位 - 1

「セカンド？」

「ああそうだ。そう覚えてくれて構わないよ」

セカンド、と名乗った男は適当に答えて南條に手を伸ばした。

「！？」

思わず身構える南條だったが、セカンドの手が下ろされると同時に、カチ、と気持ちの良い音がして拘束具が外れたため、南條も少し警戒を緩めて応える。

拘束具が全て外れ、南條は上体を起こしてベッドに腰をかけた状態になり、訊く。

「なんで拘束具外したんだよ？」

「拘束したままが良かったのか？」

「んな訳あるか！」

「なら良いだろう。……着いて来たまえ」

言って、セカンドは南條に手錠をかけることもなく部屋から出てしまう。

——付いて来い。そうセカンドは言った訳だ。

扉の横に立つ防護服の人間は飾りの様に動きを見せる気配はないし、セカンドは武器を持っている様には見えない。隠している場合もあるだろうが、南條は——経験のなさから——脅威を感じなかった。

逃げて大丈夫かもしれない。そんな状況で、南條は、

「おう」

あえてセカンドに着いていくことを選んだ。

この相変わらず意味不明な状況下にいる中で、一人でいるというのは正直心細い物がある。例え同伴者が敵意丸出しの明らかに危ない人間でも、一緒にいた方が心落ち着けてよいのだ。少なくとも、慌てなくて済む。それに、一人である『バケモノ』や『怪獣』と対

峙した場合と、明らかに何か知っていそうなこのセカンドと一緒に対峙した場合では、絶対に後者の生存確率が高いといえる。

何より、セカンドは防護服の連中と違って会話ができそうだ。今まで全くこの施設内の情報が手に入らなかったが、上手いこと話を進めれば情報を引き出せるかもしれない。

（とにかく、何処に連れてく気なのか知らねえけどよ。出来るだけ情報を聞きだしてやる。ディエナの事もあるしな……）

2

「きゃあ！」

防護服を着た三人の連中に放り投げられる様に小さな真っ白い部屋に入れられたのは薄手の青いドレスに身を包んだディエナ・トワイライトだ。

「ここで待っている」

ガスマスク越しの声がディエナに一方的に押し付けられ、三人は部屋から出て行こうとする。

「ま、待ちなさいよ！」

ディエナはすぐに立ち上がり、連中を引き止めようとするが、ディエナが連中に届く直前で扉は斜めに閉まってしまふ。そして、ディエナの力ではどうしても開けられないほど硬く行く手を閉ざしてしまった。

ディエナは何度も何度も扉を叩き、扉の向こうに人間がいるかなんて分からないのに叫び声を上げる。が、返事は勿論返ってこないし、部屋の中に余りに声が反響しすぎて外に届いてすらいらないと思えてくる。

体力の無駄か、とディエナは冷静に考え、数秒で叫ぶのを止め、部屋の隅っこに行き、壁に背を預けてゆっくりと腰を下ろした。

（何がどうなってるってのよ……この状況）

あの『怪獣』なんてとてもじゃないが信じられない存在だ。その目で見て、現実であり本物であることはしっかりと認識している。だが、怪獣なんて存在は現実には存在するはずなく、特撮映画やアニメの中で暴れまわる架空の存在だというディエナの頭の中の認識が邪魔をして『夢じゃないのか』と理性は体験した現実を疑ってしまっていた。

——あれだけの出来事があって、夢なわけがないのに。

（——そうだ、来人は……！？）

ディエナと南條は別々に連れられたため、互いの行き先を互いに知らない。南條は気を失っていたのでどちらにせよ場所を知るすべはないのだが。

と、なるとずっと意識を持っていた一応ながらも、どれくらい移動した、と道が分かるディエナが南條を助けに行ければ良いのだが。

（……、あのバケモノが、ゾンビが現れたらどうしようもなくなっちゃうし、どうすれば良いっていうの！？）

今のディエナにそこまでできる力はなかった。

ノーツが死んでしまった時には、冷静さを失ってしまったがために自らを死に追い詰める様な事をしたが、ディエナだって死にたいわけではない。生きたいに決まっている。勿論、この状況では『できれば』と前に付けなければならぬのだが。

（『選抜』に『一般』……、だったかしら？ あれにはそういう意味が……？ 選抜、選ばれた……？ この状況。バケモノにいつ遭遇するか分からないこの状況。見知らぬ、いかにも怪しい防護服を着た連中に拉致されるこの状況に選ばれる……？）

訊いたうる覚えの言葉を数個ピックアップしてディエナはディエナなりに現状を整理しようとするが、どうにもヒントが足りず答え

まで辿り着けない。

答えのわからないパズルを目の前に置かれてディエナが苛立ち始めて数分の時間があつという間に流れた。

もう考えるのは止めて何か起きるのを待とう、ディエナがそう諦めた時だった。

鋭利な空を切り裂く音が部屋に響いた。聞き覚えのある音に反応し、ディエナは迷わず扉へと目をやる。

「誰？ あなた……？」

扉が開いて、一人のスーツを着た人間が入ってきた。

いかにも『出来るサラリーマン』といった雰囲気醸し出すその男。見た目からして年齢は五。代だろう。オールバックにして後ろに降ろした眺めの黒髪が歳相応の渋さを演出している。

男は、背後で扉が閉まる音を受けて、感情の起伏が感じ取れない声色で言う。

「私は『ファースト』だ。これから君にいくつか質問をする。答えろ」

3・順位 - 2 (前書き)

南條来人、？

ディエナ、ファーストと接触。

3・順位 - 2

「何よ？」

「何、簡単な質問をいくつかするだけだ。答えたまえよ」

ファーストとやはら感情の起伏が薄い口調ながら溜息混じりにそんな事を言つて、部屋の隅で壁に寄りかかつて座るディエナの前に立つ。決して視線を合わせるようにしやがんだりなどせず、目の前で視界を遮るように立ったままディエナを見下ろして、言葉を落とす。

「嫌よ。その前に私の質問に答えなさいよ」

が、ディエナがファーストにやすやすと従う気はない。

それもそうだ。何も理解できないまま怪獣、バケモノに襲われ、連行され、何の説明もないまま謎の人物が目前に立ち、質問に答えると吐く。そんな事に道理が通るはずがない。

ムツと表情を歪めてファーストを睨むディエナを相変わらずの表情で見下ろすファーストに動揺は見取れない。まるで、喋るオモチャを冷ややかな目で見る大人の様だった。

「……、良い。三つのみ許そう」

暫く考えるような間を空けて、ファーストは言う。

「ありがとう」

フン、と荒く息を抜いて、ディエナは続ける。

「まず、じゃあ一つ目。ここは何処なのよ？」

「日本だ」

「……そうじゃなくて、詳細を、」

「それは二つ目の質問にするが？」

「……、じゃあ良いわ。次。私『達』はなんでここに連れてこられたのよ？」

「選ばれたからだ。これについては後で説明する。サービスだ、ノ

「カウントにしてやろう」

「じゃあ、二つ目は『あなたは何者』なのか？」

言っと、二人しかいず、最初から大して盛り上がりもしないこの部屋が更に静寂になったような気がした。

ディエナの見上げるファーストは相変わらずの無機質なロボットを思わせる無表情っぷりだが、一瞬だけ表情を引きつかせたような気がした。

ファーストはゴホン、と一度咳払いして、

「私達……私は順位保持者のファーストだ」

「順位保持者？」

「三つ目」

「……、良いわよ。それで」

「順位保持者。我々『U機関』のトップに並ぶ者の総称である」

「『U機関』？」

「そこまでだ。今度はこちらの質問に答えてもらおう」

「はいはい」

U機関だの、順位保持者だの、ディエナにとっては訳の分からない言葉が並べられたが、収穫がないよりマシだ、と思いディエナは大人しくファーストに従う。

U機関がなんだ、とは分かりはしないが、機関と付くくらいだから組織なのは間違いないだろう。一般人を拉致し、あのようなバケモノを飼う組織の『トップに並ぶ者』、目の前のファーストとやらがそうである以上、一般人のディエナに抵抗を見せる利益はない。

眉一つ動かさず、ファーストはツイと視線を逸らすディエナに質問を投げる。

「南條来人との面識はここ以外であったか？」

（なんで来人の事が？）

疑問に思いつつ、ディエナは答える。

「私の覚えている限りでは……ないわよ。私も日本に来て長いしね。すれ違ったくらいはあるかもしれないけど……」

「ふむ。よい」

（なあにが、よい、よ）

「では次の質問」

ファーストがそう言いきったところで、場の雰囲気は僅かに重いものに変わった、とディエナは気付けた。

何が変わったか、それに気付くのに時間は要さない。

「執事が死んだ時君は、『生き残れる』と思ったか？」

「……っ！？」

まさか、とは思ったが確信した。してしまった。

この無機質なロボットみたいな男ファーストは、何者かもハツキリさせずに『ディエナに気を遣っていた』のだ。そうとわかると、ノーツの事を思い出した苦しみなんかよりも、悔しさがこみ上げてきた。やったのは明らかにファースト達『U機関』とやらであろうというのに、その連中に気を遣われるなど、

「ふざけないでよ……」

戯言でしかない。ファーストの言葉は戯言にしか聞こえない。ディエナに正確に言葉を届かせるにはフィルターを取り除かなければならないだろう。勿論、そのフィルターを今剥がすことなど出来やしないのだが。

弱弱しく、憎しみを漏らしたディエナ。続けて、

「ふざけないでよ！ あんた達が殺したんでしょ！」

今のディエナに質問に答える余裕はない。

悔しさがこみ上げ、やっと、ディエナは怒った。

人を殺しておいて、その言い草か、とブチ切れた。

ふざけんな、と吐き捨てた。

「何が『生き残れる』よ！ あんな狂った場所に拉致して生存確認！？ 頭可笑しいんじゃないの？ 来人がいなきゃ『私はとつくに死んでた』わよ！」

——興奮し、涙交じりにそう心から叫んだディエナは、部屋に反響するくらいに気持ちよく叫んだというのに浮かれたりはできない。

そして、質問に無意識に答えていた事にも気付けはしない。

3・順位 - 3 (前書き)

- ・南條来人、？
- ・ディエナ、ファーストと対峙。

3・順位 - 3

ディエナの叫びを聞いたファーストはふと表情をニュートラルな、少し力の抜けたようなものにして、ディエナからやっと視線を逸らして考えるように天井を見上げて溜息を吐いた。

なによ、とディエナが不満気にファーストを睨み付けていると、ファーストがそれに気付いたかのように丁度良いタイミングで視線をディエナへと視線を落した。勿論、ディエナはそんな事で視線を逃がしたりはせず、無機質な視線と鋭い視線が重なり続ける微妙な空間がそこに映る。

と、その状態でファーストが口を開いた。

「君はいらない。すぐに帰らせよう」

と、予想外の、絶対に予測できない答えが落されてディエナには受け止められない。世界が滅ぶ瞬間を見てしまったかのような、驚愕した、言ってしまうえば間抜けな、力の抜けた表情を見せてしまう。

「帰って……良いって……、え？」

ディエナ自身、こんな場所から素直に「逃げ出せない」だろうなと思っていた。実際、あんなバケモノや怪獣に襲われて、ろくに自己紹介もしないで質問を強制させるような人間に会話を強いられて、完全にファンタジーなこの現状で、「帰ってよい」なんて言葉は幻聴かと疑ってもしかたない。それにディエナは南條来人に守られて、拉致されてなんとかここまで来て、このファーストとやらと会話した。している。

その短いような長いような時間でこれといった行動をディエナは起こしていない。そんなディエナが「帰ってよい」といわれる理由は、

「そうだ。『ご両親』に向かいに来させる」

「パパとママを？」

「そうだ。ここは一応日本だが少しだけ『遠いからな』」

やはり、おかしい、とデイエナは思う。

正直、この場にいるから、という先入観を抜いて考えてもこの状況は『裏の事実』だ。ファーストがここは『日本』だと言うが、信じれる情報ではない。が、国境等関係なしにこれは『危険な状況』なのだ。ゾンビに、特撮ライクな怪獣。こんなバケモノ達が存在するなんて世間は間違いなく認めていない。そんな光景を見たデイエナを易々と『逃がす』だろうか。

複雑な心中が表情に出て、デイエナは気付けばファーストから視線を逸らして俯き、一人で考えに耽っていた。

(……。ありえない。こんな事が地球のドコだろうと起きているのよ？ もし私がこの場所で見た事を誰かにリークでもしたら……。最悪戦争よ。それだと言うのにこのファーストは私を帰らせるですって？ 何が目的なのよ……)

「心配しなくて良い。いや、これは私に向かって言う言葉か」

まるでデイエナの心中を分かっているかの様な言葉がファーストの口から漏れてデイエナに落される。

「心配？」とデイエナが眉を潜めて聞くと、

「そうだ。簡単なことだ。考えるまでもない。CGで作った様な怪獣に絵に描いた様なゾンビ共、謎の施設にファースト等と名乗るアジア人。そしてその場所に拉致された君。これらの情報を君がどこかにリークしたでしょう。……、」

一瞬、深呼吸する様な間が空いて、

「誰が信じると言うのだ？」

言い切った。

デイエナを見下ろす表情は相変わらずの無機質な無表情だが、どこか不敵に笑いを見せているかの様にも思えた。デイエナはそんなファーストの言葉に外連味を感じつつも、そうか、と納得させられ

る。

ディエナの表情を見下ろしながらファーストは続ける。

「君は『選抜』だ。私達の方で内情は調べさせてもらっている。君のご両親が『資産家』で君は所謂令嬢。確かに、一見すれば権力があり、国を動かす発言が出来てしまうかもしれない。だが、そんな君が見ただけの状況を誰が信じる？　ありえない状況だ。絶対に」
今度こそ不敵に笑って見せて、「誰も絶対に信じない。それに私達も情報を一切漏らさない。漏れても心配はない。この機関は情報を掻き消すだけの映画に出てくる様な組織だ。そもそも、私達以外で私達の存在を証明できる人間、いや、証拠品、は存在しないのだ」
ファーストは、フン、と最後に鼻で笑ってまで見せた。

「……、確かに。そうね」

納得、全て納得してしまったかの様にディエナは呟いた。――が、ディエナの心中では疑問が渦巻いていた。

気付いていないことがあった。ディエナではなく、ファーストに、だ。

（こいつ……『騙されてる』？）

ディエナがそう気付いた、その時だった、
開くはずがないであろうこの部屋唯一の扉が、シャツと鋭利な音を立てて開いた。

当然、二人の視線は横に流れてそちらへと向かう。

ディエナは見逃さなかった。一瞬だけ、ファーストが驚いたような表情を見せたことを。

「ディエナ！」

部屋に、低めのハスキーボイスの叫び声が轟いて、ファーストを威圧した。

気付くのは簡単だった。そう、ただ見れば良いだけだった。今まで気付かなかったのが不思議なほど、簡単、容易いことだったのだ。
「——ッ!？」

南條は思わず絶句した。見てはいけない現実を見てしまったかのように、息が止まるかとも思った。実際、数秒間南條の呼吸は止まっただろう。それ程の光景が、南條の目の前——あの切り裂かれた左腕——にあった。

「? ああ、今気付いたのか」

セカンドは振り返り、後方から付いてきていた南條の絶句した表情を見て少しばかりおもしろそうに言う。この様子から、セカンドは知っていたと伺える。そんな事が分ければ南條はすぐにでもセカンドに飛び掛って殴り倒していただろうが、今の南條はそんな事に気を回す余裕を全く持たない。

——切り裂かれたはずの南條の左腕が、漆黒に染まり形を作っていたのだから。

3 順位 - 4 (前書き)

- ・南條来人、セカンドと共に行動。
- ・デイエナ、ファーストと？と接触。

3・順位 - 4

よく見れば、左腕は完全に真っ黒に染まった訳ではないと気付けた。肘から手の甲まで伸びる二本の赤い線。ただ、赤い線と言っても、まるで血管を直接見ているかの様にその赤い線は流動を見せる。勿論、こんなモノが自身の腕に付いていて冷静になれるはずがない。

南條は勿論冷静さを取り繕うとはした。

ここで慌てて冷静さを失ってしまえば『ディエナ』の情報を探せなくなる。

だが、南條まやはりただの人間。限界があつた。いくら場慣れしていても、激痛が走れば人間は反射的に悲鳴を上げ、体を縮ませる。それと同じだ。いくら認識して受け入れようとしても、目の前のソレは明らかに人間にはそぐわない『異物』だ。そんなモノをいきなり自分の体の一部だと受け入れられる人間等存在しないだろう。「なんだよコレはッ！！　こんな……ッ！？」

「君の左腕だろうに？」

南條の悲鳴、戸惑いにセカンドはわざと挑発する様な楽しんでいる事を主張する浮ついた声色で南條に『認めさせてはいけない』現実を摩り込んでいく。

こうなるとセカンドがこの場の流れ、主導権を握ってしまう。

受け入れがたい現実が目の中から張り付いて休息も与えてくれない。南條の左腕は、『左腕』でしかない。ただ、肘の上までが漆黒に染まり、流動する真っ赤な二本のラインが入った。

異常だ。だが南條はその腕が本当に自分の物だと理解していた。自身で動かして、この『力』を感じているのだ。疑う余地は理屈上はない。

「な……、」

言葉を詰まらせた南條はセカンドに驚愕して見開いた大きな瞳を向けたかと思うと、

「何しやがった!？」

瞬間、ギツ、と視線だけで人命を殺めそうな鬼の様に表情を歪めて、南條は目の前のセカンドに両手を伸ばし、胸倉を掴みあげた。そのまま押し、廊下の壁を壊しても可笑しくはない勢いでセカンドを叩きつける。

「……………」

それでも何とも言わないセカンドに向かって、南條は我が儘な子どもがだだをこねるかの用に、不満をセカンドにぶちまけた。

「テメエ…………!! この墨みてえな左腕は何だよ! お前等が何かしたんじゃねえのかよ!？」

ギリ、と忌々しげに歯軋りして強烈な視線を数センチという距離で向けられるセカンドはそれでも、どこか面白そうにしているかと思えた。不敵に笑っているような——実際はそうでないのだが——そんな雰囲気、そんな余裕がセカンドにはあった。

興奮して息を荒げている南條でさえ、気付くほどのモノだ。

「……ネメシス」

セカンドは、やれやれ、といった感じの溜息交じりの言葉を漏らした。

「は？」

「ネメシス。知っているか? 破壊神の事だ」

余りに得意げに、外連味たつぷりに言い切るセカンドが南條には不満の対象にしかない。

「だから何だつてんだよ!？」

南條は感情のままにセカンドに怒鳴りつける。が、やはりセカンドの態度は崩れない。まるで、感情が自由に操作できるプログラムのような代わり映えしない細い表情。その表情に南條の本能は間違いなく違和感を覚えている。が、今の興奮した南條がそれに気付くはずもない。

——大体、今セカンドの首下を絞めているその漆黒の左腕の力が単純に倍以上に増えている、という事にすら気付いていないのだ。そんな見て、体験して分からない事を知る余裕はない。

「……ネメシス。これがあの『バケモノ』や『怪獣』を作る生物兵器だよ」

「は？」

南條はこんな状況にしながら、常人とは比べられないほどに冷静だ。勿論、興奮し、落ち着けきれない所はあるが、常人が同じ立場にいた場合と比較して南條は冷静だ。冷静、だから予測してしまっただ。

（まさか……。映画やゲームみたいにゾンビなりバケモノなりを作る生物兵器……。最近兵器が存在するってこのセカンドは言いたいのか……。？）

「ちょ、ちょっと待てよ！　んなモン存在だけで国際問題にまで発展する様なモンじゃねえか！！　そんなモノが……。」

南條の言葉は最後まで搾り出すことは出来なかったようだ。フェードアウトするかのように言葉は尻すばみになり、最後の方はこの廊下に響きさえしない。無理はない。南條は自身で気付いているのだから。自分は、とんでもない状況に置かれたのではないかと。

（……、って事は。この左腕はまさか、）

思った時だった。まるで心が読めるといわんばかりの丁度良いタイミングでセカンドが僅かに口角を吊り上げながら、

「そうだよ。その左腕はネメシスに感染したことによって修復したネメシスの力が宿った左腕だ！　しかも『特別製』のなあ！」

南條の、まさか、は意図も簡単に当たってしまった。一ピースしかないパズルを悪ふざけせずそのままクリアされた様な気持ちだったと思う。

ここで、また南條の頭は真っ白に——なりかけたが、南條はなん

とか抑えた。ここが、チャンス、かもしれないからだ。奴は『特別製』と吐いた。この『特別』にはきつと『殺せないほどの』特別な何かがある、と思えた。と、いうのも、この『ネメシスに感染した』左腕そのものが『特別』なのであれば、先程の『しかも特別製のなあ！』という言葉は不要になる。これは、きつと何かがあると南條は踏んだのだ。

——が、同時にもう一つの嫌な憶測が南條の頭から出て行かなくなってしまった。

(……、ここから逃がす気はないって雰囲気だな)

いくら胸倉を掴み、南條が睨みを効かせようが目の前のセカンドは動じない。赤子と対峙している、そんな、『負けない』といわんばかりの度胸だ。

「一応聞くけど、」

南條は嘆息して、セカンドの首下かた両手を外して下にダラリと垂らして、

「俺を逃がす気はないんだろ？」

答えは分かっている。南條もなんで聞いたのかと自身に言い聞かせてやりたくなる程に明白なことだった。勿論、返ってくる答えは、「当たり前だ。君が知っている情報だけでもソレは判断に至るだろう?。」

南條に掴まれてグシャリと皺の寄ったスーツの胸元を治しながらセカンドは相変わらずの様子で吐く。

不意に、「あ」とセカンドは思い出したかの様に続けて、

「一応言っておくが、あのディエナ・トワイライトとやらは帰宅できる可能性はある」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7415y/>

お嬢様と執事様

2011年12月6日02時51分発行